

糸乗 貞喜

(よかネットNO.40 1999.7)

インターネットのアドレスを持っていても、誰もアクセスしてくれない人もいる。山の彼方の不便な所に住んでいても、わざわざたくさんの方が訪ねてくれる人もいる。700～800年昔の話だが、「をのをの十余ヶ国のさかいひをこえて、身命をかへりみずして、たづねきたらしめたまふ御ころざし」と親鸞が述べている（歎異抄）。結局「情報化社会」というのは、人間の魅力のことかな。

CDに卵を乗せて 情報化社会を行く

売場を拡げたのではなく、「待合室をつくって、コーヒーやお茶のサービスをしたら、売上げが2倍になった」という話を聞いて、モノの売上げ増加の理由が“売場”ではないところが面白いと思った。

早速、紹介していただいて話を聞きに行った。北九州小倉南区湯川の卵屋（らんやと呼ぶ、TEL: 093-931-5155）である。

見出しに付けたCDと卵の話は、当主の笠田和代さんの話である。「東京のお客さんから、CDが30枚と卵の贈り先のリストが送られてきましたね」卵の包装の中へ、CDを入れて贈ってくれという注文。そのCDは「卵かけ御飯」という柳家小三治のトークショーのライブ版である。この贈り物を受けた人たちの夕食の風景が見えるようである。

卵屋は、4年前（平成7年）に4人のオパチャン（と笠田さんが云われた）で始めて、今では18才の若い娘さんも働きに来るようになり、28人が働いている。

もともと卵屋（たまごや）なのだが、高品質の卵にこだわり、それを生かしたカステラやシュークリームなども作るようになった。そしてカステラとシュークリームが売上げの半分にも達している。正月の1日から9日まで休む以外は年中無休で、大変だなと思ったが、極めて元気印の人たち

だった。

シュークリームは、2時間以内に食べる人でないと売ってくれない。私はチャッカリ、お店でいただいた。卵の方は、品質が良いのでギフトに使われることが多い。卵のネーミングは「庭先たまご（有精卵）」で始まって、「初生みたまご」、「福福たまご（ふたつ玉）」、「温泉たまご」、「ハッピーエッグ（くんせい卵）」などたくさんの種類がある。ギフトとしては、快気祝、出生祝のおかえし、結婚式の引き出物としてはじめに送っておく（当日持ち歩くのは大変なので）などといった注文が多い。

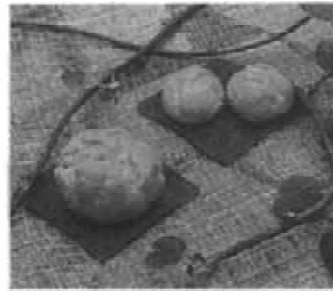
持参するギフトも多く、その場合はシュークリーム、カステラも入る。したがって商品を取り揃えるのに、お客様が取り合わせを考えられるため、かなり時間がかかることが多い。つつい待ってもら客も増えることになり、申し訳ないので、待ちスペースとトイレを作り、そこでコーヒーとお茶を無料で出すことにした。その所為か、クチコミの所為かはわからないが、今年は去年の2倍の人達が来てくれている。

私が言いたいのは、待ちスペースの件にしても、卵の品質にこだわっていることも、柳家小三治のCDの話も、これは単なるモノ売りのことではないということである。“思いやり”とか“気配り”を贈るサービス業の域に達している。

2010年は“気配り・思いやり・願望”の時代である。

山のかなたの情報センター（宮崎県椎葉村の焼畑民宿の椎葉夫妻）

5月中旬、椎葉村へ出かけた。福岡の天神から都市高速道路で約15km、太宰府から九州自動車道で約100km南下すると熊本御船インターチェンジへ着く。そこから一般道路で70km余りで椎葉村の「中心市街」と道路標識で案内された集落に着く。そこから、ちょいちょい行き違い用の場所の



卵屋の商品

左: たくさんの種類たまごが楽しいパッケージで送られてくる(卵屋パンフレットより)

中: 新鮮な卵を使ったシュークリーム

右: 柳家小三治のCD 卵かけご飯の話が出てくる

ある狭い道路を、道を間違えながら車で約1時間半で「民宿焼畑」に着く。天神を朝8時に出て、途中で「通潤橋」を見たり、そばやダゴ汁の昼食を取ったりして行ったので、標高900mぐらいの「民宿焼畑」へは午後4時頃着いた。差し詰め陸の孤島とでもいうところで、確かに離島を除くと、九州でも最も到達しにくいところだ。

ところが、ここが「山の暮らし、山菜の見分け方、食べ方」などについての、高品質で大量の知的情報のセンターとなっている。その中心が椎葉秀行(76歳)、クニ子(75歳)夫妻である。情報サービスの営業開始は民宿に着いたらすぐに始まり、以下次のように展開する。

着いたらすぐに追い出されて、ワラビやゼンマイを取りに行く。スカンボを割ってかじったりもする。

夕食は豪華版だ。天ぷらだけでも16種類の山菜がつく。さらに、おひたしや和えもの、煮もの、魚の焼きものなど、解説を聞きながらいただける。

夕食後は焼酎を飲みながら、クニ子さんが昭和21年にこの家に嫁に来たとき、兄弟が10人おられたので、全員で14人家族だったことなど、日本の山村の近・現代史の実話講義が続く。

夜中、冷えていたので小用を足しに外に出る。一面闇の世界だが、頭上一杯に広がる星の世界。連れのみんなどは知らずに寝ており、何となく自分だけトクしたような豊かな気分で布団に戻る。翌朝はまた、秀行さんから山の暮らしの話聞くことができる。

さらに運が良いと、庭でクニ子さんから庭や道端の何十種類もの草や花の特徴、食べ方などを聞くこともできる。

夜と朝の味覚は、もちろん文化的欲求を満たす

ものである。

我々の目的も、この御二方に会って、元気な顔を見せていただき、上記の情報に接することだけだった。十分に満足した。

ここでは、同じような目的で来た別のグループやテレビ会社の取材班も来ていた。品質の良い情報があれば、結局人々がそれを求めて、どんな不便なところへでも出かけて来るということが実証されていた。

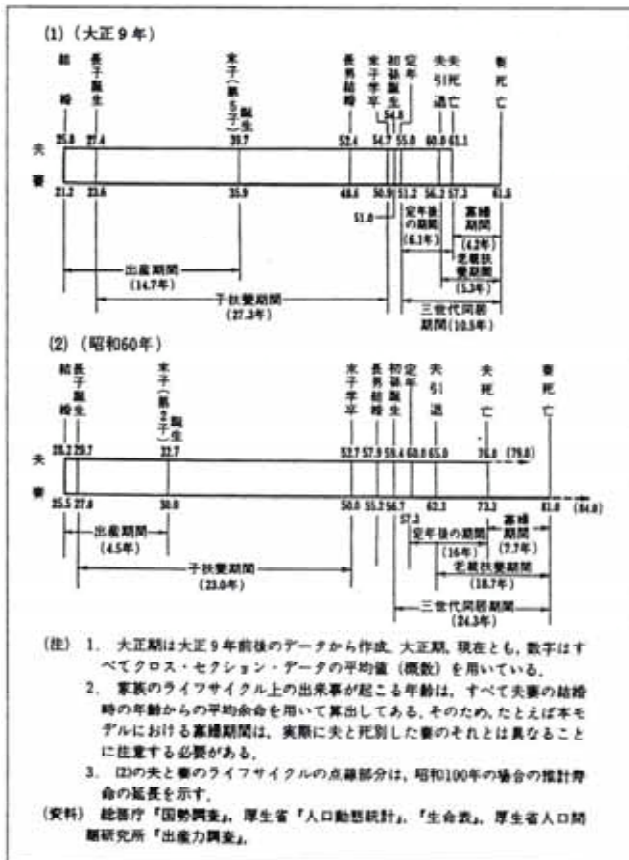
ついでながら、クニ子さんからの聞き書きによる「おばあさんの植物図鑑」「山の暮らし日記」という見事な本が出ている。御一読いただきたい。

経済学のライフスタイル仮説や最近の中高年の人々のアンケート調査で考えると、2010年にはモノが売れなくなっている。

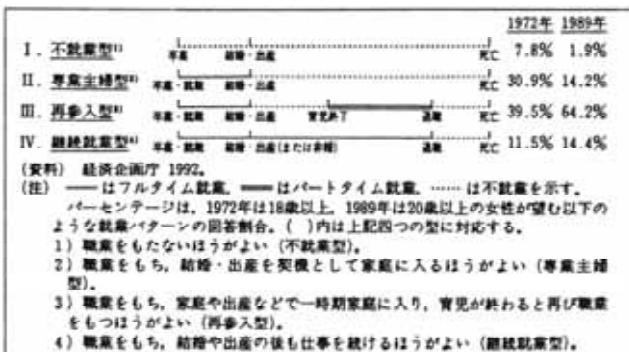
戦前と戦後のライフサイクルの変化を図表1の(1)と(2)に示す(「日本の人口、日本の社会」昭和63年版、人口問題研究所編)。ライフサイクルというのは、結婚、長子誕生、末子誕生、孫の誕生や離職、配偶者の死亡などを経て、本人の死亡に到るプロセスのことである。

経済学のライフサイクル仮説は、消費が所得だけによって決まるのではなく、若いときは老後に備えて貯蓄し、引退後それを崩して使う・・・というような説明である。消費財、とくに耐久消費財などは若い世帯と高齢世帯では明らかに違う。

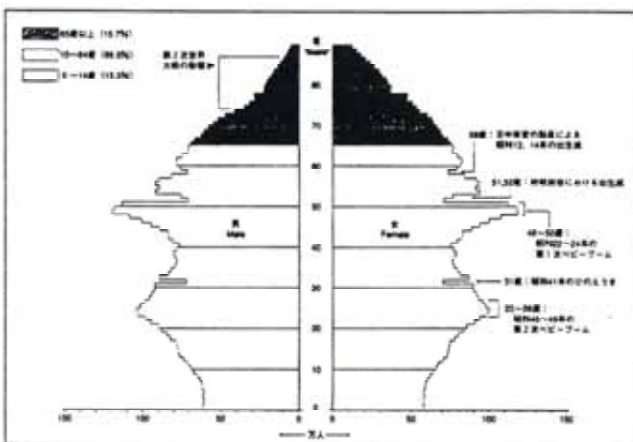
図表1の(1)をみると、大正9年には、5人の子どもの扶養期間が27.3年で、それが終わると初孫をみると同時に定年を迎え、その後5~6年で死亡している。消費という点でみると、人生のほとんどの期間を通じて 人の子育て養育のための支出が続いたことになる。それが昭和60年には、2人の子どもに対して、23.0年に短縮され、養育が終わってから夫で23~24年、妻で30年生き続け



図表1 戦前、戦後の家族のライフサイクルの変化



図表2 女性のライフコース:4つのパターン



図表3 わが国の人口ピラミッド(H9.10.1現在)

ることになっている。この扶養義務後には耐久消費財などの消費性向はずっと下がるにちがいない。

もうひとつ「女性のライフコース：4つのパターン」という表がある(図表2)。これによると1972年と1989年の間に専業主婦が大幅に減ってパートタイム就業再参入型が大幅に増えている。1972年頃は合計特殊出生率が2.0以上であった(つまり既婚者でみると3.0以上が、かなりあったことになる)。しかし1989年になると、それが全体で1.5くらいに下がってしまった。この傾向が変わらないものとするれば、成人夫婦は2人だけを前提とした消費に向かうにちがいない。

いずれにしても、戦後の日本の消費をリードした第1次ベビーブーム世代は、2010年には60~64歳になっている。モノ消費をリードした世代が、今後はモノばなれ消費をリードすることになるだろう。そして、アンケートなどによると、この世代は、いわゆる「子どもに美田を残す」ような考え方はないらしい。

いよいよモノより遊びに対する消費が主流になりそうだ。さらに言うと、この次の第2次ベビーブーム世代も、2010年には35歳ぐらいになっている。そろそろモノ離れ世代に入りつつある。正確に言うと、日本の生活パターンの大転換が、ひと区切り終わるのは2015年だろうが、その動きは今からジワジワ始まりつつある。

都市開発事業などは、うまくいっても5年、多くの場合は10年近くかかる。仮にモノ売り施設の計画をしたとしても、店が出来上がる頃には、上記の動きが一層はっきりしていることになる。もちろん、計画の中でサービス型施設への転換を読み込んでおけばいいのだが。